

## 令和2年度 第3回熊本市小中一貫教育懇談会議事録

日時：令和3年(2021年)1月21日（木）

14:00~15:30

場所：SPring 熊本花畠町 7階会議室

### ○議事録

- 1 開会
- 2 教育委員会あいさつ
- 3 懇談会

古賀座長	<p>それでは、早速ですが、第3回の小中一貫教育懇談会を始めさせていただく。議事としては、小中一貫教育・小中連携教育の実践報告、指導課より説明、ということで、今年度と来年度の取組を明らかにするための最後の懇談会となる。</p> <p>まず、小中一貫教育・小中連携教育の実践報告について、事務局からの説明をお願いする。</p>
事務局	<p>今回の実践発表は2校にお願いしている。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・Aグループの小中一貫校から芳野小学校に、またBグループから平成30年度に小中一貫教育モデル校として取り組まれ、その後継続されてきた小中連携教育について楠中学校に発表していただく。</li><li>・2校の実践報告からご示唆をいただき、次年度から、Bグループの中から小中一貫教育モデル校として取り組んでいくようにしております、実践も含めてBグループを小中一貫校へ移行することを推進して参りたいと考えている。</li></ul>
井手教諭 (楠中教務主任)	<p>楠校区の幼小中連携教育について報告させていただく。</p> <p>楠校区には、楠中、楠小、榆木小、それから楠幼稚園が、お互い徒歩約5分圏内にある。したがって、2小1中+1園で、地域の子どもたちの12年間の教育に関わることになり、その期間の連續性を意識した、見通しをもった学びを提供していくことができる。</p> <p>一貫性のある教育を進めるには、中学校を卒業するときにどのような子どもに育つていってほしいか、その姿を共通認識とすることが必要。それぞれの学校教育目標、そして子どもたちを育ててもらえる保護者さん、それを支えている地域の皆さんのがんばりがあり、何より子どもたちには夢や希望がある。私たちはそれらを踏まえて目指す姿を描き、それに向かうために必要なことを課題として取り組むことにして、実態把握のため、小中で同じ内容の学校生活アンケートを実施した。次はその集計結果をまとめたグラフである。実施は平成30年3月。小1から中3までの集計だが、いくつかの項目で数値の落ち込みが見受けられる。これらはそれぞれ、自分の考えや意見を進んで発表すること、自分の取組を振り返ること、毎日自学や家庭学習に取り組むこと、そして、姿勢よく生活や学習をすること、という内容。私たちはこれらを、共通して取り組むべき課題とした。そして、3校の全ての職員が授業充実部、生徒指導部、学習環境部の三つに分かれて、「考え方を伝える力」や「自分を振り返る力」の育成を授業充実、「学ぶ姿勢」については生徒指導部、「家庭学習」や「教室環境」などについては学習環境部が担当し、先ほどの項目について具体的な実践を工夫している。各部会の長は、中学校職員が担当することとして、部会同士の情報交換もしやすくした。合同研究推進委員会で全ての情報を共有し、校長園長会で、確認をしていただく。現在は研究推進委員会の役割は、教務主任会と幼小中連携担当者会が担っている。また校長園長会も定期的に実施されている。</p> <p>実際の動きとしては、職員同士、子ども同士がともに活動することから始め</p>

て、中学生が出向いて合同あいさつ運動をしたり、職員の合同部会を数回実施したりしたが、学校ごとに違うスケジュールで動いているので、時間の調整が難しいという状況も多々あった。そこで、連携イコール一緒に活動すること、という概念から、同じ目標をもち教育の連續性を意識した方向性を共有することというように連携をとらえ直した。そして熊本市のスタンダードを参考に楠校区で独自に作成した。保護者にも配付して、学校での取組への理解と協力をお願いした。注目したいのが、幼稚園の欄が設けてあることだ。幼稚園の目線でとらえた具体的な取組が示されている。幼稚園段階においては、「友達と一緒にいろいろ遊びを楽しむ子どもの姿」を目指して、「はい」と返事をする、じっくり遊び込む、できることは自分でする、のびのびと体を動かす、などが明記されている。このような内容は、特に中学校の職員にとってはとても新鮮であった。くすのきスタンダードの中で、生徒指導部が中心となる内容が「豊かな心」と「健やかな体」の2つの部分。授業充実部が「確かな学力」の学び方の部分。学習環境部が「確かな学力」の中の学びを支える基盤づくりとなる学習用具と家庭学習の部分を担当する。

では、まず生徒指導の実践である。課題である「授業のときの返事や聞く姿勢」、そして挨拶については、以前から取り組んでいる「立ちどまりあいさつの徹底」、「家庭学習を含む基本的な生活習慣の定着」に取り組んだ。家庭学習については、規則正しい生活をする中で、毎日その日の授業の復習に取り組むようにしたところ、学習の質が変わってきて、ただノートを埋めるということから、自分が疑問に思ったこと、授業で関心を持ったことについて調べ学習をするというような主体性が見られるようになった。立ち止まりあいさつに関しては、ポスターを作成し、各学校で掲示をして意識を高めた。集会や委員会活動で生徒会から呼びかけをするなど、主体的な取組になるようにしている。また、校区の学校で共通の学習スタイルとして、くすのきルールも作成した。小学校では、表現をもう少し簡単なものにした。拡大したものを各教室に掲示して、子どもたちも、それから指導にあたる職員も日頃から意識できるようにした。次に、学習についてである。小学校低学年の保護者さんの中には、必要なものが何なのかよくわからないと言われる方も多いということから、具体的なものやその数について提案した。小学校から学習用具について、自己管理をする意識と習慣を身につけてくるので、中学校では学習に必要なものを自分で考えて準備することを目指した。小中で同じルールを基本としているので、中学校に入っても違和感なく学習環境を整えることができるようになった。この項目で幼稚園では、筆記用具ではなくて、遊びに必要な道具について示されている。就学前の子どもたちには、このような意識を育ててもらっているということを、改めて学ばせてもらった。

次は、授業についてである。授業充実部では、熊本市の授業づくり5つの視点の中特に「めあて」と「振り返り」、「めあて」に迫る子供たちの主体的な活動の工夫に取り組んだ。各教科の学習内容の連續性を意識した授業づくりをしている。英語科で作成したCAN-DOLISTという小学校3年生から中学校3年生までのそれぞれの到達目標を意識して、乗り入れ授業や合同の教科会を実施しながら、英語教育の推進に努めている。中学校で夏休みに行っているイングリッシュ・ゲートウェイでは、準備と当日の運営は中学生が担当している。小学生と中学生が組んで、ゲームやクイズに取り組みながら、英語によるコミュニケーション能力を高める。当日は熊本市のALTも多数協力してくれて、とても楽しい時間となっている。参加者のリピーターも多く、小学生にも中学生にも実践力を生かす場として大きな意義をもつ行事となっている。また、楠校区ではICT活用にも力を入れている。楠校区の三つの学校では、平成30年度からICTを活用した協働学習の工夫に先行的に取り組んできた。

	<p>タブレットを授業で活用することで、「教わる授業」から「学び取る授業」へと変わってきている。子どもたちは授業の中で、自分の考えを伝える、話し合いながら新たなことに気づきさらに学びを深めていく、这样一个の学習に取り組んでいる。小学校から積み重ねをしていますので表現力も付き、中学校でもスムーズにタブレットを活用した学び合いの学習ができている。</p> <p>このように3校1園での連携教育に取り組んできたが、成果として、生徒の意識や行動にも変化が見られた。グラフ（平成30年3月に実施したものと同じアンケートをその年度の10月に行い集計したもの）を見ると、課題として捉えていたどの項目においても数値が上昇している。実際に子どもたちの様子からも、自分の考えを伝える力、めあてをもった学習や、立ち止まりあいさつなど、小中ともに意識が高まってきたのを感じる。学習ツールとしてのタブレット活用も、それぞれの学校でさらに工夫をしながら実践が進んでいる。タブレットの活用については、子どもたちの技能習得が早くとても上手に使えるので、職員も意欲的に技能習得に取り組んでいる。小学校から活用が進んでいる状況を、中学校で止めてはいけないという意識が生まれてきて、授業づくりの研究を進めるモチベーションとなっている。今年度は臨時休校中のオンライン授業を行ったが、楠校区では、これまでのタブレット活用実績を基盤として、スタートの日からスムーズに実施することが出来た。教室には集まらなくても授業ができるということで、子どもたちだけでなく、教師も、それから保護者の方にも安心感が生まれた。中学校では、オンラインでの授業を進めていく中で、タブレットの機能を使って離れた場所にいる子どもたち同士で合同学習が出来ないかという新たな可能性を広げる研究実践にも取り組み始めた。先日、その研究授業を実施したところだ。小学校でもそれぞれの研究テーマで実践に取り組んでいる。</p> <p>これから課題としては、職員構成が変わっていく中で、校区の3校1園で、このような実践を続けていくという意識を持ち続けることが必要である。くすのきスタンダードや授業の工夫に関しては、必ず校内研修で共有するようにしているが、さらに積極的な取組がこれから必要になるかもしれない。また、これまでの取組を基盤とした学校それぞれの個性ある取組を進めていくことも、大切ではないか。楠校区で育していく子どもたちのための教育をそれぞれの園や学校で受け持っているという意識を持っていきたい。以上で発表を終わる。</p>
吉賀座長	<p>ただ今の発表について意見があればお願いする。</p> <p>ネーミングが上手である。活動やプログラムといった名前をきちんと付けることによって、情報の発信力量と先生方や園児児童生徒との交流がうまく進む。続いて、芳野校区。西釜校長先生、お願いします。</p>
西釜校長 (芳野小)	<p>芳野小中一貫教育についての実践報告をする。</p> <p>本校は平成29・30年度に小中一貫モデル校として連携を進めてきた。その時の推進事業の目的が次の2点である。私たちは一貫校である。まず一貫教育と連携教育の違いの共通理解をもった。連携教育は円滑な接続が目的ですが、一貫教育は系統的な教育をするという違いを意識して取り組んでいこうという共通理解をもった。</p> <p>芳野校区の状況について。山間部に位置し面積は中央区に匹敵する。基幹産業は農業。開校当時の人口は1,884人、65歳以上は42.0%、14歳以下は8.7%。典型的に少子高齢化となっている。</p> <p>学校概要について。</p> <p>芳野小、芳野中の一小一中で今年は開校2年目です。児童数76人、生徒数2</p>

	<p>5人で合わせて101人。学校教育目標は、芳野小、芳野中それぞれ立てている。全然違うように見えますが、これは芳野小中一貫校の目指す児童生徒の姿「十五の春の姿」からそれぞれの実態に応じて目標を立てている。</p> <p>小中一貫校としての取組について。</p> <p>連携教育から一貫教育に向けて、組織として、推進部会、合同研究部会、保小中連携の日部会があり、推進部会が中心となって動く。</p> <p>推進部会の主査は中学校の教務主任。目標や「よしのスタンダード」の作成、合同行事や日常の取組、アンケート実施等を行っている。</p> <p>合同研究部会の主査は中学校の研究部長。研究主題や理論の構築、授業改善、合同授業研究会、合同研修等を行っている。</p> <p>保小中連携の日部会は、各校区で行っている幼小中連携の日と同じように進めている。</p> <p>「よしのスタンダード」では、中学卒業時のゴールが「十五の春の姿～ふるさと「芳野」を誇りに思い、夢に向かって自立する児童生徒」。</p> <p>1年生から4年生を基礎期、5年生から中学1年生を連携期、中学2・3年生を発展期として取り組んでいる。そこに、徳・知・体と、総合的な学習の時間・生活科の時間を系統化して取り組んでいくことになった。徳・知・体は、本年度の目標を焦点化して設定している。徳…あいさつ、返事。知…家庭学習。体…健康増進、体力向上。生活・総合（芳野学）…体験活動、勤労活動。</p> <p>校区の実態に応じた取組の推進について</p> <p>高学年教科担任制・小中学校間での乗り入れ授業として、音楽と外国語はそれぞれ5・6年生に週1時間ずつ定期実施している。国語と体育は不定期実施。国語では「俳句ウォークラリー」の事前授業、体育ではT2として中学年の「とびばこ指導」を行っている。このように小学校において中学校教員の専門性を活用するということで進めている。</p> <p>小中合同行事としては、10年以上前から合同運動会を行っている。企画は小中の体育部。主査は小中体育主任の隔年交替制としている。教育上の配慮として、総務・団長を小中それぞれに設定している。PTA主催の合同行事もあり、リサイクル品回収作業や愛校作業を行っている。</p> <p>児童生徒の情報共有としては、どの校区でもされていることだと思うが、小学校から中学校へ、卒業時に要配慮児童・保護者の情報を提供する。日常的には小中学校双方向で、事案発生時に情報共有を行っている。児童生徒だけではなく保護者に関しても、アプローチの仕方など情報共有している。また、本校区には人通りの少ない通学路が多く存在しており、人しか入れない通学路もある。そのため、通学路点検を行ったり、スクールバス変更時に一緒に対応していったりしている。</p> <p>授業づくりとしては、合同校内研修を実施している。研究理論の共有、共通理解、合同研修、次年度の志向の共通理解などを行っている。今年度は遠隔で行った。「熊本市学力調査の分析を生かした授業づくり」は未着手である。</p> <p>成果と課題について。組織に関しては、主査を明確にすることで部会が機能した。それにより活動が具現化された。実情に応じて改定することが求められる。</p> <p>「よしのスタンダード」に関しては、目指す子ども像の共有化が進んだ。徳・知・体の取組の明確化も進んだ。しかし、「芳野学」は一貫校として機能していない。（一貫校としての）教科等のカリキュラムも設定できていない。</p> <p>小学校高学年への一部教科担任制・小中学校間の乗り入れ授業に関しては、専門性に応じた指導ができ、児童の学習意欲が向上した。「中1ギャップ」は緩和されている。ただし、乗り入れ授業が中学校からの一方的なものになっている。教科担任制も、教科担任制「的」なものである。評価は小学校の担任がすべてしている。</p>
--	---

	<p>合同行事の開催に関しては、9学年にわたる学校の社会性育成機能がとても働いた。ただし、学校主催の合同行事は年1回となっている。</p> <p>児童生徒の情報共有に関しては、連携した初期対応が継続してできている。これからも保護者と良好な関係を続けていく。</p> <p>授業づくりに関しては、「熊本市学力調査の分析を生かした授業づくり」に着手できていない。</p> <p>今後の志向について。「よしのスタンダード」の改善、「芳野学」の再構成として、小学校の行事に中学校を、中学校の行事に小学校を組み込むことを考えている。これにより小中一体感が向上し、社会性育成機能の向上にもつながると思う。また、これを小中間の乗り入れ授業としても位置付ける。</p> <p>熊本市学力調査の授業づくりへの活用として、分析を反映した授業改善を実施する必要がある。中学校で判明した課題を、小学校で指導を強化して早期対応する。連携期における「素地づくり」として取り組む。</p> <p>また、保護者、地域への定期的な情報発信も必要である。</p> <p>最後に、熊本市教育振興基本計画（第二期熊本市教育大綱）の基本理念「豊かな人生とよりよい社会を創造するために、自ら考え主体的に行動できる人を育む」ために、小中一貫教育に取り組んでいきたい。</p>
古賀座長	<先進校視察報告>
川上委員	質問等あればお願ひする。
西釜校長	倉橋学園について、3小学校2中学校が統合した際、部活動はどうなったのか。
川上委員	部活動については質問も説明もなかった。ただ、中学校の部活動は行われていた。小学校では、私が見た範囲では確認できなかった。
古賀座長	教員がたくさんいるので、負担を軽くするために、小学校の教員を中学校の部活動にあてるというようなことがあるのか気になり質問した。
古賀座長	次に指導課からの説明をお願いする。
	< 指導課からの説明 省略 >
古賀座長	3点について意見をお願いする。 ①小中一貫校及びモデル校に関する調査の結果から、教職員が課題と感じる内容について ②小学校高学年一部教科担任制実施状況調査の結果について ③令和3年度からBグループへモデル校を広げることについて
坂本委員	以前示されていたスケジュールでは、令和3年度のBグループについて、一貫カリキュラムの「作成準備」とあったが、本日の資料では「作成」となっている。Cグループについては、連携カリキュラムの「評価・改善」から、「連携カリキュラムの作成」とされている。準備をせずに「作成」となるのか。
事務局	Bグループの一貫カリキュラムについては、「一部作成」へと変えた。
坂本委員	本校では、来年度「作成」のために連携をしなければと考えていたところ。「作成準備」から「作成」へと変わった意図が知りたいし、そこまでできるのだろう

	うかと心配である。
事務局	Aグループでもカリキュラム「作成」が難しいという意見をいただいている。Aグループでの実践をBグループに示しながら、最終的には「作成」していただきたいが、表現については検討する。
塩津委員	小中一貫校及びモデル校に関する調査について、経年比較していくということだが、一貫校とそれ以外の違いもわかると、今後推進しやすくなるのではないだろうか。
坂本委員	小中一貫校及びモデル校に関する調査について、質問10「自分は、まわりの人（家族や友人）から認められていると思う。」では、小2から小3・4で、肯定的回答が大きく減っている。この大きな変化はなぜだろうか。
事務局	この項目は、昨年度作成する際に、呉市を参考にして入れたものである。呉市は20年近く小中一貫教育に取り組まれていて、文科省の会でも発表されている。その中で、小学校5年生から、「自分は認められていると思う」という指標の値が極端に落ちている。小4くらいまでは「万能感」が強く、「自分はやればできる」という気持ちの方が勝っているが、小5くらいからはそこが弱くなり、「認められていない」と疎外感が強くなる。それが「中1ギャップ」の前の段階になっているということで、呉市は小5、小6、中1を中期とする根拠とした。熊本市ではデータがなかったので、呉市のような指標でデータを取ろうとした。その時、「認められていない」という言葉が小1や小2にわかるだろうかということを考えて質問項目を作った。その影響で小3から値が落ちているのではないかと考える。実際は、同じような項目で聞けば、小5から落ちると思われる。小3と小4は「関心をもたれている」、小1と小2は「仲良く遊んだり、協力したりすることができている」という質問になっている。昨年も、表現がうまくいっていないという話はあった。ただ、これから小中一貫教育を進めていく中で、9年間で子どもが一番苦戦する時期が出てくる。学習や生活で苦戦するのが小5から中1。中2や中3は孤独であっても安定期に近づいていく子どもたちもいる。とにかく中期を手厚くしようとしていて、小学校高学年一部教科担任制はその一つ。ここは4-3-2制のもととなる質問項目であるので、本当はそのような結果が出るような質問にしたかった。質問の言葉を変えたことでこのようになった。
古賀座長	アンケートの「教職員が課題と感じる内容」について、一貫校での取組があれば教えていただきたい。
中西委員	昨年度、芳野中にいたときにモデル校として指定された。廃校や統合も考えられるほど学校規模が小さい芳野中を残し発展させる機会であると、当時の教職員には説明した。こういう学校ではこのようなやり方で教職員の意識を高めることができた。Bグループへ小中一貫校を広めていくには、こういったメリットを示していくと良い。教育委員会から短い時間でわかりやすくメリットを説明してもらえると現場としてはありがたい。
事務局	小中一貫教育を進めるにあたって、それぞれの校区で、9年間で目指す子どもの姿を柱としてスタートしていただき、その後に枝葉の部分を少しづつ整えていくのが良いと考える。校区でカリキュラムを作る中で新しい教科を考えいくことも可能になる。少なくとも、教職員が負担に感じることがないように、

	小学校の時の子どもの姿を中学校の教職員が、中学校の時の子どもの姿を小学校の教職員が知 MERCHANTABILITYできるよう、事務局から示していければと思う。
事務局	<p>教育センターでは研究モデル校について担当している。榆木小・楠中からはタブレット端末に関する研究モデル校の希望があり、楠小もその点の研究は進められている。教育センターとしては、この3校が足並みをそろえて取り組んでいくことで、小中一貫教育のモデル校ではないが、Bグループの小中一貫校として取り組んでいくことも可能ではないかと考えている。</p> <p>これまで、Aグループの学校には小中一貫教育のモデル校としてお願いしていたが、今後は中学校区で同じテーマで研究していくことをベースに、小中一貫教育につなげていくことが考えられる。</p> <p>また、準備については、BグループはAグループと違い小学校が複数あるので、小学校が足並みをそろえていないとなかなか進んでいかない。ある中学校区では、小学校3校でまず小小連携をするということで、英語を中心としたカリキュラムマネジメントに関する研究モデル校の希望があった。そこから小中連携、小中一貫へつなげていくことを提案していただいた。</p> <p>今後、Bグループに小中一貫教育を進めていくには、準備が必要。そのための中学校区で同じテーマで取り組んでいくという方法はあるし、小学校同士がつながって中学校を巻き込むという方法もある。</p>
事務局	<p>いろんな課題を解決するにはきっかけが大事である。ある校区では、人権・生徒指導上の面で、小中連携が始まったと聞いている。そこで教職員が交流を始めたことがきっかけでうまくいくようになったという。別の校区では、幼小中で遠足を始めたことがきっかけで、生徒会が結び付き、教職員が結び付いた。そして小中一貫教育へつながっていっている。</p> <p>教職員が何かのきっかけでつながることで小中一貫・連携教育が深まっていくのではないだろうか。</p>
小田委員	<p>コロナ禍において小中連携ができていないところが多いのではないかと思う。教職員が課題と感じる内容については、何を目指すのかというのがぼやけてしまいかがち。メリットはあるので、子どもたちの交流や教職員の交流など取組をしていきながら、地域の願い、保護者の願いが叶うような、そして子どもたちも満足するようなことをしていかなければならない。系統性の共有やつながりというところをやっていかなければならない。B・Cグループはその点で心配である。</p>
中嶋委員	<p>河内小中は今年度から小中一貫校となって、いろいろなことを計画していた。しかしこのコロナ禍でできないことが多く、最低でもこれだけはしようということを決めていたが、それもできないということが多かった。取組をしていかないと教職員の意識が変わらないということがわかつた。必要性は理解しても取組をやらないと意識が低くなってしまう。そこが課題だった。</p> <p>校長のリーダーシップが必要である。校長が必要性を教職員に発信する必要がある。</p>
川上委員	<p>人事異動があるので、毎年意識的なことを言う必要がある。今年度は小中の教職員が直接的に交流できなかった。顔を合わせなんでも言える関係でないと、生徒指導上もうまくいかない。何か危機感や一体感があればすんなり進むと思うが、毎回意識的なことを言わなければ難しい。そこで教職員自らが、小中連携しなければならないという意識を持たなければならないと思っている。デー</p>

	<p>タやメリットがはっきりと示されると、校長も客観的な良さをもとに教職員に説明できるのでありがたい。</p>
古賀座長	<p>先進校として報告いただいた呉市の倉橋学園もそうだが、小中一貫校は大都市部だけではなく、学校統廃合が進んでいる過疎地域にもみられてきた。平成27年に策定された文科省の「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」は、内閣府の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」をもとに作られている。その中では、小規模校の良さをいかすのであれば小中一貫校として残してよいというようなことが述べられている。また、県内の義務教育学校の複式学級の基準は4人。過疎化、少子高齢化が進んだ中での学校改革というものが強く出てきている。熊本市でも少子化が進んだところでは地域の学校を残すための小中一貫校というのは説得材料に使える。ただ、一般論として申し上げれば、教職員の意識改革としては、小中学校の教職員ではなく「義務教育のプロフェッショナル」を目指すためにどうするかという視点で小中一貫教育の説得力がでてくるのでは。</p> <p>次に、子どもの発達、子ども理解の中で出てきている様々な課題をどう解決していくかというときに、教育課程を変えていくとともに、指導方法の改善というところにもご注意いただきたい。</p> <p>また、楠校区の報告で、幼稚園をしっかりと位置付けられていた点が良かった。この10年の小中一貫教育の議論の中で、幼稚園の位置づけが少し弱かった。これから公立の幼稚園をどう活用するかということも考えていきたい。</p>

4 事務連絡

5 閉会